

五日鎌倉にも、北條左近太夫公時、同中務太輔教時は、時輔に一味して、執權を討たんと計りし事も水の泡、とても消なん身の果と、討手を引受け、散々に戦て、討つうたれつ修羅闘争、鎌倉中の男女泣惑ひ、目も當られぬ騒亂に、謀叛の一類、數百人討れはしたれ、彼も一味かあらぬかと、人の心の疑はれ、いかに成るべき世の様と、安き心もなきにつけ、大聖人の御教化に預りし人々は、兼て仰せの自界叛逆難、北條一門の同士打に信力いよいよ増進せりとぞ、

日蓮が信仰の堅固なると、抱負の偉大なると、北條を憤るの激烈なると、妙法を弘むるの熱心なるとは、髣髴として目に在るが如し、曰く「日蓮は佛の御使也」と、日蓮は日本國の魂也、柱なり、曰く「日蓮茲に在て此妙經を護持すればこそ此國雲

時安穩なるに似たり、日蓮去らば必ず喪ふべし、嗚呼何たる大獅子吼ぞよ!

日蓮が慧眼若くは預言は着々として應驗せり、他國侵逼難及び自界叛逆難は現に起れり、但し日本國は、何が故に、亡びざりしや、日蓮の見地よりすれば、是は當然の事のみ、日蓮は斷言せり妙法を捨て、或は此我を殺さば國危うしと、然るに北條時宗は遂に文永十一年を以て日蓮を佐渡より呼戻し、且法華宗門弘通の免狀を下附し、併せて良田一千町を寄附したり、勿論日蓮は之に満足せざりしと雖も、法華弘通の道は疏通する事となりたれば、其志の幾分は己に達したりと謂はざる可らず、只日蓮が千歳の遺憾といたるは朝敵國賊と思惟いたる北條氏を、竟に滅ぼす能はざりし事なりき、嚮

に時宗懇談して、道理は兎も角、世人悦ばねば、念佛、無間、等の激語を差控えられたしと請ひ、且寺を建て地を寄附せんと申し出せるや、日蓮は謹んで答へけらく、御芳志多謝す、日蓮此國に生れたれば、身は將軍の命に順はざる可らず、但眞理は眞理なれば、心には服す可らずと、又布教の免諫を賜はるや、慨然として曰く、是は只我が妙法に諂ふのみ、之を信受するに非ず、止ぬる哉、我それ退隱せん歟と、是より身延山に退嬰所たる城廓を看出せり、北條滅亡に關する一縷の望は尙元軍の彼を倒さんも知る可らずと云ふに係れり、然るに百千の艦艦は「神風」に吹き壊られ畢んぬ、而して日蓮は其翌年を以て武藏の池上に入寂せり、北條氏を滅ぼすの役は或る他の人の手に保留せられてありき、

余輩が屢々比較し來りたるジョセフ、スミス亦夙に大志を懷きてありき、一千八百四十四年の春スミスは其建設せる大市ナウヅーより衆に推れて、合衆國大統領の候補者として打て出たり、此時米國は奴隸問題の爲に痛く惱されてありき、スミスは乃ち其獨立なる主義綱領を公けにして國民に告たりしが、兵馬に關する大統領の權力を増んとしたる如き、奴隸廢止の最良法案を提出したる如き、尤も時勢に適切なる者なりしと云ふ、

此時大統領の候補は他に五名ありき、曰はく、カルハウン、カツス、シヨソソ、クレー、バンピウレン、是なり、スミスは此等に書を與へて之が政綱殊に其モルモン教徒に關する者を問ひ、之を答へたるクレーとカルハウンの説には自ら詳評

を加へたり、但し奴隸問題に就ては後人をして其卑見に舌を捲しむる如き意見を吐露したるぞ殊勝なりける、即ちスミスは明言して曰く、奴隸の廢止は實行せざる可らず、然れども廢奴論者が普通に唱る所の如きは是れ人權を侵害するや、大ならんとす、南部の栽植家奚爲ぞ其既得の財産を妄に奪はるべけんや、合衆國政府は須らく官有地を賣却して、奴隸所有者即ち南部の所謂栽植家に賠償するを要す、然らざれば必ず慘憺たる兄弟戦争(内亂)を醸生せん而已と、夫の大思想家、エマルソンは是より十一年の後公然とスミスの此平和的な廢奴賠償論を自説として唱へ出せり、但しスミスは自ら其政見の行なはれざるを己に其十三年前に知りをれりと見ゆ、即ち一千八百三十二年に於て彼は既に後

日南北の間に戦争あらんことを預言すらく、叛亂は必ず南カロライナ州に端緒を發せんと、果して一千八百六十一年四月十二日南カロライナ州に於て南兵サムタル砲臺を砲撃したるを手始めに該大戦争——幾十萬の兵を殺し億兆の生靈を塗炭に陥しめし内亂——は開始せられたり、
 諸天下の形勢彼が如く、スミスの政見此の如くなりければ、自然の勢に任せばスミス或は大統領に當選せしやも知るべからずして、其勢力中々侮る可らざる者ありき、是に於て乎ミソリ及イリノイ二州の人民は政治家も宗教家も俱に均くジョセフ、スミスを殺さんと計り、廢兒門教徒を亡ぼさんと務め、種々の誣告に基づきて遂にスミス並に其二三の股肱を捕へ、頓て暴徒と民兵とは當時のイリノイ州知事フ

ナルド (Lord) の默許を得て之を虐殺し了りぬ、本人に取りては何等の大遺憾ぞよ！

要するに、彼と云ひ、此と云ひ、共に靈魂はいざ知らず、形體は恨を地下に吞める者と謂ふべし、噫！

第十章 箇人としての日蓮

按ずるに、宗教家として偉大ならんと欲する者は、亦一箇人として偉大ならざる可らず、夫の詩人が身酒色に沈湎し乍ら、其錦心繡腸を金殿玉樓の上に披瀝し得る如きに非ず、是を以て酒色の奴隸たる大詩人は或は有り得べしと雖ども、酒色の奴隸なる大宗宗教家は決して有り得べからざれば也、是れ酒色の奴隸たる者は普通の宗教家たる資格をさへに失ひ了るが故なり、故に偶ま肉慾的快樂を何等かの理由のために遂行せんと欲するや、其事を祇敬して天啓若くは佛勅と稱せざる可らず、マホメットの如き、親鸞の如き、皆然らざるは無し、例へば親鸞師が肉食妻帯の教義を主張せんと

欲するや、先づ六角堂參籠の靈夢なる者を持出したたり、曰く、
建仁三年四月五日六角堂參籠の心地するや五更の夢枕に
救世菩薩白蓮華に端坐して、甚だ嚴そかに告げて曰たまは
く、

行者宿報設女犯、我成玉女身被犯、

一生之間能莊嚴、臨終引導生極樂、

此の兒戲めける四句の一偈こそ門徒宗にとりて千萬鈞の
値ある者なりけれ！古今眞に一轍、英雄往々能く人を欺む
く哉、

按ずるに、恩を知るといふ事は實に萬徳の母たる者にして、
上に立ては衆庶の悅服する所となる可く、下に在りては長
上の愛護する所となる可し、此の心、親の恩を感じるや發し

て孝と爲り、君の恩を感じるや發して忠となり、他の恩を感
ずるや發して感謝となり、報恩と成る也、日蓮は此の美德を
多量に有したり、是れ彼が成功したる所以なりとす、彼は第
一父母に至孝なる者なりき、日蓮は初より父母を思ふ情を
心頭より須臾も放棄せざりき、元と兩親の同意もて僧とな
されし者なるが故に、却つて親子の俗縁は一層深く結ばれ
斷たざりき、十年行脚苦學の後、故郷に歸りて父母を省み、舊
師（清澄寺の道善坊の）を訪へる其懇懃懇篤なる感ずるに餘ありと謂
ふべし、日蓮の精神は、天下を救ふと同時に、亦父母の德輝を
發揚せんとするに在りき、宜なる哉、大孝徳、行章の言や、蓋し
當らずとも遠からざる可し、

『外典に曰身を立て道を行ひ名を後世に揚て父母を顯す

は孝の終と教へたり、高祖の如きは實に世の大孝子なり、其故は御身旃多羅の家より出で、一宗の祖となり、躬は大乗の道を行ひ、天下の父師と仰がれ玉ひ、名は後世に揚て朽ることなく、賤しき父母にも自ら旃多羅たるを隠して世の嘲りを防ぐ、其孝他に比すべからず、抑も母の實家は正しく市川村の漁父なり、爾れども團五郎に嫁する故に世人母共旃多羅なりと思へり、是れ高祖の不忍所なり、祖父を蓮次郎と號すること古へより其家の邊りに池あり、古來蓮多きを以て蓮花の潭とも云ひ習はせるなり、此池の邊りに在る家古きが故に、代々蓮の字を名とせり、遠國の人云蓮花澤とは高祖降誕の時蓮花を生せしことありてより蓮の澤と云或は高祖手自ら蓮花を植へ玉ふ故に蓮花の池など云是高祖の大徳故それを世人附會して奇談をなせり噫是の方便の一助なり後世此説を以て正義とすべし母を長女と名く

るとは蓮治郎の長兒なるが故なり、高祖の御物語ありけり、此故に高祖は祖父と母との頭字を取て蓮長と名乗り玉ふ、これ祖父母の恩を忘れ玉はざるの御意なり、又父團五郎事は入道して妙日と號し、母長女は尼となりて妙蓮と號す蓮は即ち父の名に依るなり、高祖長く父母の恩を謝せんが爲に二親の名を取りて、日蓮と名乗り玉ふ、父母家にありては、人に輕ろしめらるると雖も、今高祖の名となれば誰れか日蓮の二字を穢れりとせんや、是れ孝の至りなり、夫れ父母家にありては、奉給するは誠に是小孝なり、出家して未來永劫を助くるは實に大孝なり、吁々高祖の徳義大なる哉、日蓮が父母に孝なる心は亦彼をして其師に事へても恭順ならしめたりき、彼が歸省の際清澄寺に道善坊の饗應を受

けたりといふ話の如き、實に和氣の靄然として座間に麗春を移したるが如かり、豈善巧方便の力のみにて焉んぞ能く茲に至らんや、

抑も愛は互に相酬ゆる者なり、我より八分の愛を投ずれば、彼亦八分の愛を我に投ず、是を以て慈眼愛腸なる者は亦徧く衆に愛せらる、佛國革命の際ミラボウが六百代議士に推戴され、天下公衆に敬愛されたるも偏へに彼が灑洒磊落にして懇篤親切なりしに由ると稱せらる、カーライルは之を美質中の最大美質と評定せり、ナポレオンが爐邊に於ける薄情の一言は幾萬の兵士をして其熱心を冷却せしめ、隨て己れの滅亡を速めしめたりと謂ふに非ずや、之に反して善く兵を愛する名將は士卒をして、死を甘んぜしむ、此點に於

ても亦ナポレオン之が好適例なりと知らずや、

日蓮は實に深く恩に感ずる人なりき、第四章(七十七)に説き及ばせし如く、日蓮が富木五郎胤繼に對する感謝心は眞に無限なる者なりき、富木氏が最初より莫大の資財を擲ちて日蓮の布教を助け、日蓮の大檀那となりて一切の費用を給せしかば、日蓮は感歎して言へり、「日蓮若し上行菩薩の再誕ならば、富木殿は無邊行菩薩なるべし、火を熾んにするは風の力なり」と、唯に彼を六大老僧の上に崇めしのみならず、身延山開基の後、富木氏の木像を手づから彫刻して、之を己が傍らに安置し、以て朝夕之に尊禮を施こしたりと稱す、此の殊勝なる心底全く世に有り難き者なりけり、

日蓮の精神已に斯の如くなりければ、凡そ日蓮の前に來る

人、凡そ日蓮と交る者は、皆一種微妙なる磁石力に牽きつけられて、多くは日蓮の弟子となりぬ、六老師も大抵此類なりき、日蓮も亦偉丈夫なる乎哉！

今重て之をジョセフ、スミスに比較するに、兩者の甚だ相似たる者あるを見ずんばあらず、反對家はスミス_を散々に罵りて、悪青年たり、瞞着家たり、不道德家たりと謂ふと雖ども、當時の錚々たる名士許多其旗下に馳せ集まり、殊に亞米利加第一の政治家（經國家）と後日稱揚せらるゝに至りしブリガム、ヤング氏之が股肱の弟子と成りしを見れば、スミスが如何に漢高然たる統御力を有したりしか推察するに餘ありとす、而して此統御力は全くスミスが和氣霽然として親切懇到極まれるに起因したりと謂はざる可らず、

他は姑く措くも、夫の人傑ブリガム、ヤング——聯邦政府の妄に派遣せる討伐兵幾千を積雪丈餘の曠野に立往生せしめ、たる俊傑安んぞ甘んじて無能敗德の一農夫に隨從せん乎、六老が僧日蓮に於るも亦此の如し、皆其德に懷ちかきて弟子と成れりし者とす、豈唯博學のみの致せる所ならんや、實に日蓮が其弟子をいたはれる至れり盡せる者ありと稱すべし、例へば伊豆の伊東へ日蓮が流さるゝ時由井が濱にて日朗と陸をに船に相分るゝ光景の如き、師弟の關係の如何に親密なるかを證し得て餘りある也、松葉ヶ谷つちへ暴徒亂入の後、日蓮は時の政府より流罪を申し渡され、將に伊豆へ赴むかむとて船に乗るや、恰も其時弟子日朗は由井が濱へと飛び來りつゝ、かよわき腕に纜を引とどめ、我れは流人日蓮が弟子

の日期にはべるかし、我をも共に同船させて給ひねと、聲を限りて宣へば、船人いかりの聲あらゝげ、おのれ青道心奴、大切の御用船に浪藉なさば、目に物見せんと持たる權を振揚て、綱に縊りし右の手を、はつしと撃てば、日朗聖人なにかは暫しも堪るべき、一聲あつと叫びつゝ、磯の渚に打すゑられ、其儘動と倒れ給ふ、餘處の見る眼も中くにあはれ果なきありさま也、日蓮大士は船舷に立揚り、官人の衆中よ、彼は幼少より我が弟子にて、しばしも側を離れざる、不便の者にはべるかし、何條一言の暇を告させ給はれと、會釋して、此方に向ひ、日期々と御聲高に喚給へば、その慕はしき御聲の、耳に入てや、起揚り、御船は未だ出ざりしか、あら嬉しや、南無妙法蓮華經と、合す掌も、右は折れて片腕、あげて泣入血の涙、大

士も噉しばたゝき、いかに日期日頃の教化を忘れたるよな、今末法に御經を弘れば、杖もて打れ、あるは又遠く流罪に成べしと、法華經勸持品に説おかれたる其明文、二千餘年の今日、唯今汝は打擲われは流罪、如來の金言違はぬ、うへは、廣宣流布も疑ひなし、頓て赦免の時を得て、再びめぐり値までは、法の御爲その身を愛せよ、此地と伊東は西東、八重の潮路は遠くとも、朝日東天に登り給はば、日朗鎌倉に在りと我おもふべし、月西山に傾くを見る時は、日蓮伊東にありと知れ、さらばくと念珠を摺り、此經難持、若暫持者と、寶塔品の偈文を唱給へば、御船は波にゆられつゝ、一聲は高く、一聲は低く、一句は伸び、一句は縮り、波の間にく遠ざかり、沖合はるか漕出たり、歸依の男女隨身の法弟達、異口同音に御題目を

唱へつゝ、あだ波ならぬ磯際に、袖しぼりつゝ見送るうち、沙
風吹たつ朝靄に、御船は見えずなりにけり（小川氏）。
是れ畢竟日蓮が平素の愛撫に基づける者とす、日蓮が同情
の言は眞に肺腑より出づ、人々をして彼が爲に身命を忘れ
しむるも道理なり、同じ日朗が他日宿谷が土牢に閉ぢ籠め
られける時の如き、日蓮は明日佐渡が島へ遠流さるとて、紙
とりのべて書き贈りけらく、（小川氏）明日は佐渡が島へ渡るなり、今
宵の寒さにつけても、牢の中の體相おもひやられて慘はし
くこそ覺ゆれ、世間に法華經を讀は口ばかり詞ばかりは讀
ども、心に讀ず、心に讀とも身によまず、貴邊は身と心とに讀
給へば、父母ならびに一切衆生を助け給ふべき御身なり、法
華經には、諸天晝夜法の爲に守護すると見へたれば、たとへ

今御身を苦しめらるゝとも、別の事はあらし、御赦免有て牢
を出させ給はゞ、疾々來り給へ、目出度面會を遂べし』云々
此の筆法を以て日蓮は群弟子及び衆檀越の歡心と皈依と
を收め得たり、自然に大衆の長たるべき資質を具ふ、欣羨の
至りに堪へざる也、

但し成功は只柔のみを以て、必し得べきに非ず、又剛の能く
之を佐くる者あるを要す、日蓮は亦實に強硬を以て其主張
を貫ぬけり、日蓮の言動は全く柔と剛と相混和し、即ち堅韌
なる者にてありき、其柔かなるに於ては婦女子よりもヤサ
シと雖も、其剛きに至りては、金剛も猶之れと堅きを競ふ能
はざらんとす、然れば北條時宗も日蓮の硬骨には敵し得ず
して、啻に法華弘通の免狀を彼に與へし而已ならず、密かに

日蓮の頑強に舌を捲きゐたりと云ふ、日蓮は武力を以ては北條氏を亡ぼす能はざりしかども、心力を以ては確かに之に打勝てり、兎に角素志の幾分は成就したる者と謂つべし、

第十一章 日蓮宗の教義

日蓮宗に於て法華經を尊とび、其題目をば淨土宗の念佛の如く、殊に鞞鼓夔々勇ましく唱へ出さしき、是は萬人の均しく看る所にして、又前章に聊か其所以を略陳したり、然しながら是は重に下根の信徒の爲に設けなせる一種の方便にして、上根の人士の爲には別に又甚深微妙なる法門の在るあり、大乘教の極理を講ず、一念三千の妙諦とは是なり、一念(心)に森羅萬象三千世界等の一切を網羅するを謂ふ也、又無作三身の妙理を説く、是即ち即身成佛の義なりとす、而して此等の事は日蓮これを悉く法華經より割り出せり、故に法華經を以て最第一の妙典とす、

更に該經の事を詳説せんに、法華經とは妙法蓮華經の略にして、梵語に、薩達磨芬陀利迦修多羅 *Saddharma Pundarika Sutra* と號す、薩は妙に當り、英佛等の語に之を眞或は善好と譯せるを見る、佛人ブルヌーフの譯には *Lotus de bonne Loi* と書けり、達磨(ダモ)は法なり、芬陀利迦は大蓮華、白蓮華等と譯す、修多羅は經典なること人の善く知る所なり、思ふに日蓮は其親の代よりして蓮華に因縁ある者に似たり(本書二十二頁を見よ)、但し何が故に蓮華を特に經に名けたりしや、又何が故に日蓮等之を特に選擇したりしや、先づ彼の著明なる妙玄には説を爲して曰く、

「法有麗妙譬亦如之此華所以例有麗妙也麗華則狂華是已、文凡列六華譬六種人然人必約法通而言之則前四時三教

皆是也以其權實法異故譬之麗華焉豈若蓮華多奇華實具足及蓮成亦落之義以譬今經權實相即及非權實等由是言之則自昔所謂蓮花三喻並譬今經妙法屬同體義者蓋正本是文約今經部旨言之故也不然在昔人法既譬麗華矣豈施權等又譬蓮華不應亦一四時而兩譬之故此一義不可不明」
但し是の如きは餘りに高尚にして、尙長文の説明を要せん、然るに加州立像寺の日輝師が嘗て著はされたる無問自答記(優陀那佛界一覽抄)は、飽までも通俗的にして、且立論明快なれば、左に掲げて、日蓮宗の正解何如んを見んと欲す、

問て云南無妙法蓮華經とはいか様なる事ぞやすこしく聞て寂光淨土にあそぶの家苞とせん

答て云妙法の五字はその意ふかくして義理まことにひろし中とのべが

たししかれどもたすこしくこれをのべなば南無とは天竺のこと葉にて歸依と云事なり心をとめ身をよせてうやまひ信する事なり妙とは不思議の意なりその徳おもひはかるべからず泥を變じて蓮花となし毒を返じて藥となしまよひをさとるとなし苦を樂となし障を福となし惡を善と轉するの不思議あるゆゑに妙と云なり法とは決定してくるひなきを云なり平等にして差別なきを云なり持てばかならず徳あるを云なり常住不滅を云なり一切衆生みな平等にそなへて本來そなはれるかならずさとりにいたる法なりさとのをしへを云なり修行の手本なり一心の妙理にして正しき道なるを法と云なり蓮とははちすの葉なり華とははちすの花なりみな妙法にたとふるなり蓮はつらなると云意にて一の臺に多くのこのみをそなへ多のこのみあつまりつらなりて一つの葉とあらはるゝ一にして百とわかれ百にして一とあらはるゝ妙法のかたちなり天然の妙理は一つなれども諸の法とあらはれ萬物一體にして一つの妙理をあらはす不思議のすがたなり一佛わかれて諸の神佛聖賢と

あらはれ諸の佛と神と聖人とみな心おなじく平等の慈悲をほどこし平等の智慧をしめし玉ふ一體萬體みな天然常住の妙法の本體よりあらはれ給ふ神佛聖人なるにたとへたる蓮なり佛の御心のとゞまるところ佛の御身のとゞまり玉ふところ佛神聖人の本心のすゑどころを蓮の臺にたとへたり又衆生の一心は一心にして無量の徳をそなへ無量の徳があつまりて一心の妙性となれるをたとへたり又世界のありさまは萬人あつまりて一人の用をとゝのへ一人のなす事萬人の身をたすけてたがひに通じてあひはなるべからず一人萬人和合して一體なるが天然の妙法なるにたとへたり又一人の智慧が萬人を教へ萬人の智慧が一人をみちびく妙法にたとへひとつの善行が萬の善根をたすけ千萬の修行も一善にこもりたがひに妙を通する妙法の修行功德たがひに和合して一體なる妙法の果報にたとへたり所詮一念三千の妙法にして天地法界の萬徳が一人のさとりに歸して佛となる妙法にたとへ常寂光の淨土一つの世界に無量の安樂國土の果報ある事を蓮と云なり華は修行にたとへたり

題目の一行に菩薩の萬行を具足して一つの花に多くのはなびらわかれ
 多くの花びら一つの花となりて諸佛菩薩萬行の功德を一遍の題目に具
 足して修行する妙法にたとへたり又花は萬物の中に妙の最見やすきも
 の奇特の變化見やすきもの妙にして文なるもの花にすぎたるはなし花
 の中に氣だかくすぐれたるかたち蓮花を第一とす花の中の君子なり聖
 賢なり神に佛にたとふべき最上第一の妙なるゆゑに蓮華にたとへたり
 又諸他の方便を以て衆生を教化し給ふに種々の方便みな利益あり方便
 によりて眞實を成就するが妙法にて文ある方便を以て眞實の悟をあら
 はす事花の文にて菓の實をたすけあらはすが如しをしへは理の文なり
 言は心の文なり星は天の文なり花は艸木の文なり實は地の文なり衣は
 人の文なり萬物みな文あり文は方便なり方便はかならず眞實をたすく
 眞實にあはずば方便をあらはすものなく方便にあらずば眞實をあらは
 す事なし方便をしり眞實をしり兩あひたすけて道なると云事を蓮華の
 花と菓と同時にあらはるゝにたとへたる妙法の教理なり又蓮花は花大

に色あざやかに香きよく佛の法身體ひろく智慧あきらかに悟の心の慈
 悲きよくして遠く又ひろく至りあまねく利益を相及し玉ふにたとへ此
 の妙悟の佛徳衆生の法華經修行の時にあらはるゝにたとふるなり又泥
 を反じて花となす煩惱五欲をはなれず着せず穢の中にありて淨をあら
 はす迷の身の上にて悟の成佛をあらはす煩惱即菩提娑婆即寂光凡身即
 成佛の妙法にたとふるなり又花ひらけばかならずはちすあらはる妙法
 蓮華經を修行する者はかならず佛果をあらはすにたとふる也又艸の蓮
 花をとりて佛の悟の妙法の名とするは衆生世間の中に佛菩提の妙法あ
 りはるゝ事をたとふるなり經の一字は佛の教を云なり教の中に理あら
 はれ文字の外にさとりなし悟をはなれて文字をまうけす五字の妙文す
 なはち三世の佛の妙理なるを經と云なり一人の教が萬人の教となり次
 第にあひつたへてながく萬代不易にをしふべき妙法なるを經と云なり
 一心の修行は千萬の修行も萬々年の修行も一心にをさめて一心を經と
 して無量の修行ながく相行べく菩薩の萬行も一心の妙經より生ずる道

なるを經と云なり五字七字の意略してかくのごとし七字は金銀瑠璃の七寶の如しこの妙法蓮花を心にたもち口にとなへ身にまもりて寂光の都七寶の宮殿にあそんで佛の常住不滅安穩快樂自在神通清淨無染の大果報を求むべし寂光の佛に供養すべき信心の行者の家苞は南無妙法蓮華經の七寶の花にすぎたるはなし』

次に一念三千の妙は頗る喧すしき者なるが日守教正は妙樂大師の疏釋を引きて左の如く之を闡明せり（心理不滅論）

『唯圓即觀一念三千三諦具足是則一心一切心一身一切身一土一切土一念俱觀若身心土若空假中受無前后故觀來時一心具一切心一身見一切身一土見一切土十方諸佛身中觀故於自己常寂光中通見十方一切身土若唯見他遮那土心迷自境若了心境自即他故他即自故不了此境自尙來』

他況觀他觀土既爾身佛身然矣

いま此の疏釋の意を按ずるに自己の心を前きに觀する時は總ての世界中の有情物の心理を知るを得へし自己の身を觀しては總て世界中の有情物の身を知るを得べし右の如く自己の心と身を觀する上は國土も亦た同じく自己の身を相離るゝことなきを觀するなり故に只世界の事物を月隨するに止まりては到底觀解を遂ぐべからず先づ心より觀し始め次に身と國土に及ぼす順序の者なり然れども若し他人の心を觀する時は逆となり此の如くなれば遂に自己の心も身も國土も觀解すべからず眞正の順序は自己の心を觀解了達すれば之より推及して一切有情物の心も身も世界も國土も悉く明瞭なる

べく觀世界中の現象物は無論漏さずして逐一窮理を盡すものにして之には修徳の佛身が住するよりして此觀解を遂ぐると云ふの義理をば妙樂大師が佛經より探て斯く疏釋したるなり

右論ずるが如く眞諦道は自己の心理より推及して一切外部世界中に現在する有情非情(人間と事物)の事理を窮盡了達すると雖も俗諦道に於ては自己の心理だも測度し盡さず出世を探らず況んや他人の心理をや又た其れ自己一身の事理をも窮めず況むや他の一身上に於てをや自他を問はず分貌明事物の窮理經驗に比して幾萬倍大切なる人間の心理一身の大事を看過して只事物の窮理に致々として人間の心理上に至ては單に想像明理論

に止るものなり此眼孔を以て心理蘊奥の經驗窮理を詳論するは韓退之が所謂る猶ほ井に坐して天を窺ひ天小なりと云ふが如し笑止々々』

日守教正は有賀長雄氏の宗教進化論を辨駁せる傍ら顯正の手段として此の言をなせる也日蓮及び該宗の學者は皆此妙理を法華經の壽量品に發見すと信じ從來該品中なる如來秘密神通之力の三句を頻りに歎稱す日蓮の御義口傳已に之を説き始めたる也日蓮曰くは無作三身依文也於此文重々相傳有之神通之力我等衆生作發發振舞處神通云也獄卒罪人苛責音皆神通之力也生往異滅悉是森羅三千當體神通之力體也今日蓮等之類意即身成佛開覺然云也云々日辰僧都も亦近頃同法門を論じて曰く(妙末萬代鑑二十四頁)

「然らば我等が全體舉つて無作本佛に非る無し……只我等が今日は苦樂昇沈自在、凡身也、釋尊の當體は權現出沒自在の妙身也……是妙宗深秘の法門なり、可秘可秘、勿論此の妙理は法華宗の獨り占有すべき者に非ず、大乘圓教の共有眞理(?)なり、然し乍ら此種の妙理を七字に約めて、只南無妙法蓮華經と唱へさへせば、極樂往生疑ひなしと教ふる如きは、少しく戲論の臭味なきに非ず、我輩はナポレオンがモスコウより退却するに當りて、其遠征の龍頭蛇尾なる甚だしきに感じ、慨然として

「高妙と兒戲とは相去る只一步のみ」
 草八頁余
 と叫びたるを再び憶ひ出さずんばあらず、

第十二章 日蓮宗の現況及生命

抑も日蓮宗は、既に論じ來り論じ去れる如くなるが故に、理論に於ては、諸宗中の最勝なる者たらざる可らずと見えつ、實際に於ては、念佛宗等と毫も擇ぶ無き戲論なりとす、勿論前章に説ける如く、日蓮宗には一種の微妙なる神學〔寧ろ佛學と稱す可き〕ありて、頗る高妙の教理を講じ、人天三界等を悉く掌上に翻弄す、而して其高妙なる教理は主として妙法蓮華經より抽き出し來れる者とす、法華經中殊に壽量品は日蓮が重きを置きたる者と見ゆ、然し乍ら弘法大師が夙に道破せし如く、法華經其物やがて戲論の一なれば、戲論また戲論〔佛教にて類するが如き法螺誇張等を凡て戲論と稱す〕と底止する所を知らざらんとす、

例の壽量品(壽量とは如來の壽命の量幾何なるかを説く也)に記して曰く、爾時世尊知諸菩薩三請不止而告之言、汝等諦聽、如來秘密神通之力云々、日蓮は之を論じて曰く、

『無作三身依文也、於此文重々、相傳有之(已に出づ)、日蓮慥於靈鷲山面授口決也』

嗚呼何たる放言ぞや、然るに此の八字を一身即三身、三身即一身の義と釋くことは天台大師より既に始まりたる者の

如し、智者大師四明沙門等の註疏に曰く、

『秘密者一身即三身(法報の應)名爲秘、三身即一身名爲密、又昔所不説名爲秘、唯佛自知名爲密、神明之力者三身之用也、神是天然不動之理、即法性身也、通は無壅不思議、慧即報身也、力是幹用自在、即應身也、云々』

日蓮の解説は全く此の註疏に基づける者のみ、然るに此八字たるや元と梵語の *mamādhishthānabāṭhanam* を鳩摩羅什師が支那譯せる者に係り、如來(釋迦自身)が久遠以來救世の爲に大決心を立てたるを謂へる而已、善くとも什師の解釋に依れば、如來の特有たる大不思議力を謂へるに過ぎずして、固より原語には如來の字なく、秘密の字なく、神通の字なければ、之を釋きて、何は秘なり、何は密なり、何は神なり、何は通なり、何は如なり、何は來なり等と分充べきに非ず、然るに此原語に在りもせぬ秘密てふ三字に非常の重きを置きて、玄義(書名)の如く餘經非秘密、法華爲秘密也等と主張するは、聊か滑稽の氣味なきに非ず、此の如き論釋註疏に本づける日蓮師の説もまた聊か戲論の姿なきに非ず、何ぞ於靈鷲山面授

すと言ふを得んや、
 釋迦牟尼は一大事因縁のために降誕すと云ふや、日蓮又直
 ちに附會して曰く（御義傳）
 『一者妙也、大者法也、事者蓮也、因者華也、縁者經也』
 と、遂に

一大事因縁

妙法蓮華經

空風水火地

頭喉胸胎是

と云ふが如き圖を安置するの類も、焉んぞ戲論ならざらん
 乎、但し此の如く戲論なりと雖ども、日蓮宗徒は法華經の功
 能書を信じて、吾宗獨り正宗なれば、終極の勝利を占めんと

聲言す、其勇氣や殆んど當る可らざる趣あり、此確信（妄信？）
 は勿論日蓮より始まりぬ、阿佛房御書に曰く、（出重）

『末法に入て法華經を持つ男女の姿より外に寶塔なき也、
 若し然らば貴賤上下をゑらばず、南無妙法蓮華經と唱ふ
 る者は我身即ち寶塔にして我身又た多寶如來なり、』
 『今阿佛房聖人の一身地水火風空の五大なり、此の五大は
 題目の五字也、然れば阿佛房さながら寶塔寶塔さながら
 阿佛房、此れより外に才覺無益なり』

此精神を以て日守教正は佛教の爲めに大氣燄を吐かれた
 り、勿論日守教正の佛教は法華開顯の佛教を指せる者とす、
 如何となれば教正も日蓮の徒なるが故に、法華宗を以て唯
 一無二の眞理たる宗教と爲せば也、即ち日守教正は其心理

不滅論』第三章(以下十頁)に『世界中に、佛教、特り、宗教なり、』と題して、揚言して曰く、

「世界に大に分て宗教六派あり、其は曰く、祖先教、凡物教、植物教、動物教、自然物教、偶像教、是也、此六流より流義は無數に立つと雖も、且く宗教は六流を出でずとす、爾るに、佛教は其六流教内に携はらず、佛教は、苟も本來本有の實理を取て、衆生中、天真獨朗に成立つ處の宗教なれば、無作の心理、實觀宗と云なり、夫れ佛宗教は人間界一部に關らず、佛界より下も九界に及んで十界の心理實相を明證して、本有を告げ、心理に權と實とを教し、へ以て信を起さしむ、是を以て佛教は十界に關涉して、人界の宗教と云はず、即ち十界の佛宗教なり、他教の如きは、人界一社會上の外は知らず、漸く人間社會集て成立つ宗教なれば、佛教に比しても、詮なし、佛教は十界を一部内として興せる宗教なり、故に範圍廣くして、抑も衆生社會も種類有り、次に國土も種多を論して、亦心理は尙更に無量無邊を説示して、其法相の廣大なる

教義の深奥を以て知るべし、佛宗教の格式萬般他教に異なる事宛かも、虚と實とに比せんか、此故に佛教は特り世界中獨尊の宗教と云なり、釋迦如來既に在世說法の時は、他方來の佛菩薩集り玉ひ其所化の衆は、素より非凡の聖者たり、釋迦如來をして法を説かしむるに、他方來の菩薩衆は、是が發起者となる、自利々他の益多し、此等を以て證す、佛教は即ち十界の關涉する宗教なるが故なり、他教は人界一部上の事實而已、逆も乏しき、空虚の業なれば、常に人間の死亡を祭るが本理と云より、外に語るべき事の無き、妄信宗なり、隨て觀念なる者は、今世に修せる所業は、死後の爲めとか、或は死者の追福とか、祭祀の爲めに、福報を得むとか、鬼神を祭らざれば、其祟りありとか、なんとの觀念に住したる邪僻にして、自己の權利を失ふ宗教なり、宗教の名稱も、嗚呼がましと云はむや、是れ等の觀念を以てする者をは、今佛教の活眼力に因て、觀る時は、實に哀れむべき、妄信宗教にして、障子一枚向ふが分らぬ、凡夫が盲目探りにも、過去の聖人が興し玉ひし宗教の所作と儀式とを、眞似したる大怪物宗教と云はむや、抑も佛教は、高尚深奥な

り十界本有の心理中に(天然本性中の事云なり)無作(主宰者なき事云なり)の獨一法界として妙不思議の心理有ることを本地久遠の聖人實觀して(己心より求めて)始めて此實修を起し玉ふが完く宗教の二字の本種子にして現在聖人は自ら修行し玉ふを受執るが本來宗教の起首と云ふ三世常住に此法相は異亂せず確乎不拔なり此故に曾て佛宗教は死後の爲めの修業に非らず或は死亡者の追福或は鬼神を祀れば福を與ふ若し是を祭らざれば祟りを加ふなどの作業觀念等に携つて興こしたる他教の如き妄信とは虚實の差異を論じて彼此に於て比較も論なく苟も此佛敎は特り活理宗教なること右の事實に就て辨ふべきなり斯る深絶なる大心理を興す宗教なれば佛敎は一世界中に特り宗教なりと名乗るも過言には非らざるなり佛敎は事理具圓して實に明なり前に云ふ他教六流は言語のみにして實相なし故に邪義なり近世文明に際しては佛敎特り時機に匹的して能く人事に冥へりとす其實は佛敎は將に自他の權利を完する宗教なり上に既に陳べたるが如く佛敎は現證久遠の當初に聖人一迷先達して自他平等の心理

中より本有の本尊たる心理を實觀(己心を實破したる事)して自行化他に涉る此即自他の權利を完ふする宗教の現證たり今日は聖人即法主(心理窮盡の主を云ふ)に騰致し玉ひて世々に聖人たり是を習修せし其人は現在聖者に隣りて既に釋迦如來在世に出現して過去を證明せり經典論疏に書載して文證現證蕩々乎たり是等は覆藏すべからざる佛宗教の實と云ふ其れ佛宗教は實義に於ける九界の權利を束縛せず況むや人界に於てをや十界互ひに同權を有して自利利他の益多し是は他教の夢にだも知らざる所と云ふべし云々』

是豈純然たる法華敎を主張する者に非ずや、勿論是等の事は實は哲學の領分に屬すれば、今此に之を委しく臧非する能はず(哲學に關するだけには)、只日蓮宗徒の主張を示す爲めに掲げたる而已、而して此の主張は全く四箇格言に所謂法華獨成佛の精神より來れる者とす、法華宗徒は斯く諸宗の無

得道を唱ふるが故に、固より他宗の存立を認めず、他宗は已に廢せられたる者と思惟す、此點に於てや又彼等は夫の再三再四比較せられたる麼兒門教徒と全く其致を一にす、麼兒門教徒もまた決して他宗派の存立を公認せず、思へらく皆謬妄なる者なりと、遂に己が唯一の眞理と信ずる者^を以て天下萬性を救はんと期す、

偕日蓮宗徒既に斯く確信しあるが故に、彼等の教會には餘宗に無き生命の存在するを見る、活氣尙該宗の僧徒間には炎々たるを往々目撃す、例の四箇格言紛紜の如きも、此の活氣の爆發したる者に外ならず、餘宗の僧侶は皆開化し、角刺れて圓きこと玻璃球の如く、宛轉自在なるも、日蓮宗徒は往々圭角の稜々として、容易に當るべからざる者あらんとす、

頑固と云はゞ云へ、生命は確に其裏面に伏在する也、

日蓮は布教の手段として隨分非常手段をも用ふるを辭せざりしと稱す、マホメツトは劍下に極樂ありと叫べりと云ふに非ずや、奴隸廢止てふ人道若くは眞理を遂行する爲めにとて亞米利加は百萬の大兵を動かし、數十萬の死傷を生じたり、果して然らば無窮の大事たる靈的死活問題につきて日蓮が時に或は非常手段を用ひたりと云ふも強がち咎むべきに非ず、深密傳福田譬喩章に云く、

「或時副元帥平頼綱の臣信清高祖に申して曰く、念佛は無間の業、禪法は天魔の法、律宗は國の姦賊、眞言は亡國の邪教なる故に、之を信ずる儕を殺害するは、殺生にありて無上の善根なりと仰せ候義、道理實に至極せりと存候、又諸

宗の堂社を毀ち神明の社殿を毀ちては、是又無類の大功德なりと、御教訓あれども、未だ悉く其意を得ず、候云々と、尋ねられけるとき、高祖喩して曰く、夫れ孔子は我徒に非ざれば、鼓を鳴して之を責て可なりと云ひき、但し今我云ふ所はそれと異り、譬へば、農夫の耕田に莠を耘ぎるが如し、これ殺生にあらず、唯福田の苗を助くるなり、今他宗を信ずる儕を或は誅し、或は讒し、或は呪咀し、又他宗の堂宇を或は毀ち、或は火すも、只妙法の教を宣布せんが爲なり、爾れはこれに過たる大善あるべからず、予はこれ如來の使なり。(法華經の語)云々、又た曰く、我言を聞て怪むこと勿れ、是れ妙法弘通の大智計なり、故に經に身命を不惜と説れたりと、つねく仰せられ侍りけり、』

聊か滑稽めけども、例の日辰僧都、日宗大學林の勇將が著はせる『一大事因縁記』の如きも、僅々たる小冊子ながら、日蓮の此の精神を尙今日に鼓吹する者あるを見ずんばならず、
『問、如說修行抄云、如說修行者は可現世安穩と何が故ぞ三類強敵盛ならんや答、云、釋尊、法華經の爲に今度九横の大難に値ひ給ふ過去の不輕菩薩、法華經、故杖木瓦石を蒙り竺の道生、蘇山流され、法道三藏、面火印をあてられ、師子尊者は頭をはねられ、天台大師は南三北七あだまれ、傳教大師は六宗にくまれ給へり、此等の佛菩薩大聖等は法華經の行者にして而も大難値給へり、此等の人々を如說修行の人と不云何、如說修行の人を尋ん然に今の世は鬪諍堅固白法隱没上へ惡治者惡人民のみ有て背正法、崇重法邪

師、國土惡鬼亂て三災七難盛起かゝる時刻、日蓮蒙佛勅、此土生けるこそ時の不祥なれども、法王此の法王は釋尊を指すの宣旨難背任、經文權實二教の軍を起し、忍辱の鎧著、妙教の劔提、一部八卷の肝心妙法五字の旗を指上、未顯眞實の弓をはり、正直捨權、箭をはげて、大白牛車に打乗て、權門をかつばと破り、かしこへおしかけ、こゝへおしよせ、念佛眞言、禪律等の、八宗九宗の敵人を責、或にげ、或ひきしりぞき、或生取者我弟子となる、或責返、責め落すれども、敵多勢也、法王の法王と云ふべきに法王との玉ふ是れ予が日蓮大法王と云證據なり一人は無勢也、至今軍やむ事なし、法華折伏破權門理の金言なれば、終に權教權門の輩を無一人責落して、法王の家人となし、天下萬民諸乘一佛乘と成て、妙法獨り繁昌せん時、萬民一同に南無妙法蓮華經

と唱奉、吹風枝をならさず、雨壤不碎、代義農世となりて、今生には不祥の災難を拂、長生術を得、人法共不老不死之理、顯れん時、御覽現世安穩の證文不可有疑者也、以上現世安穩を生善處を明さん、是れ安國論に先つ安生前更扶後此の謂ひなり又、同卅六云、哀哉、今日本國、萬人、日蓮并弟子檀那等が三類強敵責られ、大苦値、見て悦て笑とも、昨日人、上過去の法難に値ひし人を指す今日は身、上なれば、日蓮並弟子檀那共、霜露の命の日影を待計ぞかし、只今佛果叶ひ寂光、本土居住して、自受法樂せん時、汝等が阿鼻大城の底に沈み、大苦値ん時、我等何計無慚と思はんずらん、汝等何計うらやましく思はんずらん、過一期、事無程何強敵重努、努無退心、無恐心、縦頸、鋸引き切り、どうをばひしほこを以てつゝ、き足にはほだしを打てきりを以てもむとも命のかよは

んほどは南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經と唱て唱死死
 ならば釋迦多寶十方諸佛靈山會上にして御契約なれば
 須臾の程飛び來て手をとリ肩引掛靈山へはしり給、二聖
 二天十羅刹女受持者を擁護し諸天善神は天蓋を指し幡
 を上て我等を守護して慥に寂光の寶土へ送給べき也あ
 らうれしやあらうれしや南無妙法蓮華經』

是れ(前半は)法華經等に於て行者に約せられたる現世安穩
 の次第を講解せる者とす、曰く現世安穩は佛敵誅鋤より來
 る也と、夫の池袋村に大鼓の音二六時中たえず、當世紳士に
 は迷信の骨頂と誇られをる日慈師の如きも、其小冊子如意
 寶珠に唱説せる所は、正に是れ日蓮の此精神を體する者な
 る而已、彼は敢然として説て曰く、佛法を明らかにして其眞

理に頼らざる時は國家に必ず禍亂厄難起るべしと、即ち其
 例證を列べて云ふ、

『近年に於ける東北地方及び富山縣下の凶歉、九十九里の
 漁民が飢渴の窮狀は奈何、南洋の鳥島の噴火に因て、幾多
 良民の生命を瞬時に殞す等、悲哀慘憺なる事のみ續出襲
 來するの今日あるは、歸する所、國家の衆生が佛法を排斥
 疏遠したるの結果に外ならざるなり、佛法の衰頽は其國
 の衰弱を意味することは、其例古今に尠少からず
 印度は釋尊出現の國、佛法の根源地なりしに、其教法漸次
 に亂れしが爲めに、今は英國の一領地となり、佛教趾を絶
 ちて耶教蔓延するが故に、毎歲飢饉と傳染病とに苦み居
 るに非ずや、次に清國は如何ん、支那は佛法を我國に紹介

せし程の先進國なり、爾も佛法尊重の信念年を歴るに従ひて減少し、淫祠邪教其時を得、腐儒敗徳の徒世に跋扈を極めしかば、國家の擾亂絶ゆる期なく、其領土は年毎に外國に蠶食せられ居るに非ずや、

思ふて茲に至れば、吾人は餘國の事なりとして冷然に之を看過す可きに非ざるなり、殷鑑遠からざるなり、……佛法の眞理に基づかざるの結果は、自然國家に七難あるとは明白なり、今や七難中の二三災厄は既に已に迫り來りたるに非ずや、故に余は反覆演べしが如く、今日に於て釋迦如來の眞意に頼りて佛法の改善を行なひ、妙法一佛土に究め盡しなば、闇黒の夜を離れて赫々たる日光を仰瞻るが如く、佛陀の福音は邪鬼妖魔を容易に退治し得て

國家大安穩の聲を聞くに至るべしと思ふなり、

是豈日蓮大士が藥師經に基づきで他國侵逼難(外寇)及び自界叛逆難(内亂)を北條時頼入道の前に侃説諤論したると同日の筆法に非ずや、而して又彼が自信も殆んど日蓮の壘を摩せんとす、

但し此日慈大菩薩と自ら號する日宗僧は一體如何なる人物なる耶、彼が自ら記せる所によれば、彼は兄弟三人にて妙法廣宣流布を圖り、一切衆生を救助せんとの大誓願を起せり、其方法は己れの本業なりし商船業に従事し、其利益を積み立てて一萬圓に至らば一大祈禱場を建て、萬人の病難平癒を計らんとするに在りき、然るに預期せし如く、六年の間二回の大難に遭て、所有の船舶財産器具等の一切は、『青海原

の底の藻屑と消え失せしも、同胞三人の生命は無難なりしかば、共に歡喜踊躍しつゝ、二人の舎弟は北海道に赴き、予は單身甲州身延山に登りぬ。

さて此身延七面山浦山下に硯島村と云へるあり、此山奥に御池大神を祀りある大深山あり、元來此七面山には七箇所の御池あれど、御池大神鎮座の此御池こそは、七面山根本の大深山にて一番尊むべき御池なりと稱へらる、此御池大深山に籠居て三日後に至り、予は親しく諸佛諸天善神の御告に接し、「法華弘通を命ぜられ」たり、日慈師は法華宗建立の利益を問答體に記し、其抱負を述て曰く、

▲問 釋迦妙法一佛土宗を建立して、法華經の利益を世に顯し、國家安穩

ならしめんとの誓願は結構ながら、其利益と云へる事の大略を實地に就いて伺ひたし、

△答 然らば其利益を説き示さんに、

第一 假令百萬千萬の敵軍、武器を持て一時に攻寄せ來るとも、予一人にて之を擊破るの力あり、

第二 萬一海外の強國合同して數百千の戰艦を率ゐて我帝國を侵略せむと七重八重に包圍とも、八大龍王、鬼子母、大善神の大神通力を以てせば、一瞬時に數萬の兵艦を亡破すの力あり、

第三 地震、暴風、大雨、霖雨、洪水を始め、天候不順の如き天災地妖は、萬民の最苦艱を感ずる所にして、人畜の死傷、家宅田畑財寶の損害等直接に受くる災害を避け得るの力あり、

第四 特に農家に於て最注意苦心なすは暴風雨、大洪水、並に大旱魃なり、五穀菜蔬の豊凶は、寔に國家の大事にして、一朝飢饉等の事あらば、延て一國の盛衰に關はるべし、是等の災害を避け得ること亦此方に

頼て自由なるべし、

第五 我國の如き島國にては沿海の漁業は益々隆盛ならしむること最肝要なり、四時の季候の變動等に由て不漁の事無きに非ざれば、豫め此困難なからしめむことを期するには、又た此方に頼れば安全なり、

第六 人の身體に就て最も畏怖べきは病難なり、就中傳染病の如きは一家擧つて病魔に瘡さること往々見聞する所なり、眞に人生の大厄事之に過ぐるは無し、衛生醫術の學問進歩の今日すら尙ほ不充分の感あるは傳染病の治療法なり、數千人の生命と數十百萬圓の巨金を之が爲めに毎年空費するは大に歎しき事ならずや、我佛道よりして是等の傳染病を觀察すれば、鬼神邪神の仕業にして容易に之を驅逐す可きに非ざるも、予等の教法に基きなば、其病根忽地にして春の雪の消るが如く、秋の木の葉の散るが如くに其影だも止めることなく消滅なし、國中安穩の聲を聞くに至るべし、

是れ所謂る現世安穩の方法にして、今日の語に譯すれば、實に社會改良案及び國家富強策なりとす、日蓮宗徒の本色として、日慈師は佛法の力を以て之を遂行せんと企だてたり、
哀い哉——師が熱心足らざるか、時利ならざるか、策宜しからざるか、人之を妨たぐるか——其計畫は失敗に終らんとすと思はる、然れども日蓮宗に尙活氣あることは此等の數例にて粗推知せらる可けん、

ロングフェロウ曰く、「二星辰天上に消滅せんも、其光線は幾百千歳の間尙下に向ひて吾人の上に射來らん、斯の如く偉人豪傑は縦し其身死すとも、餘徳は百世猶後葉を惠まん」と、宜なる哉、日蓮大菩薩の餘光は尙今日の末流をさへに驅つて大救濟の志を立てしむ、日蓮の熱心は今猶日月と共に炳

然たり、日蓮の豪氣は今なほ天下に獅子吼す、嗚呼日蓮も亦英雄なる乎哉、今日の群小預言者日蓮に學ばば庶幾くは成功を萬一に僥倖し得ん、夫の文王なくとも興る豪傑の士に至りては固より直ちに日天子の光源に飲むを要す、何ぞ一日蓮に矜式せん耶、

日蓮論 大尾

24/1/38

明治三十八年三月七日印刷
明治三十八年三月十日發行

定價金六拾錢

著作者

高橋 五郎

發行者

前川 亦三郎

印刷者

三島 宇一郎

印刷所

弘文堂

全所 電話本局三三一六番



發行所

東京市日本橋區箱屋町

前川文榮閣

249

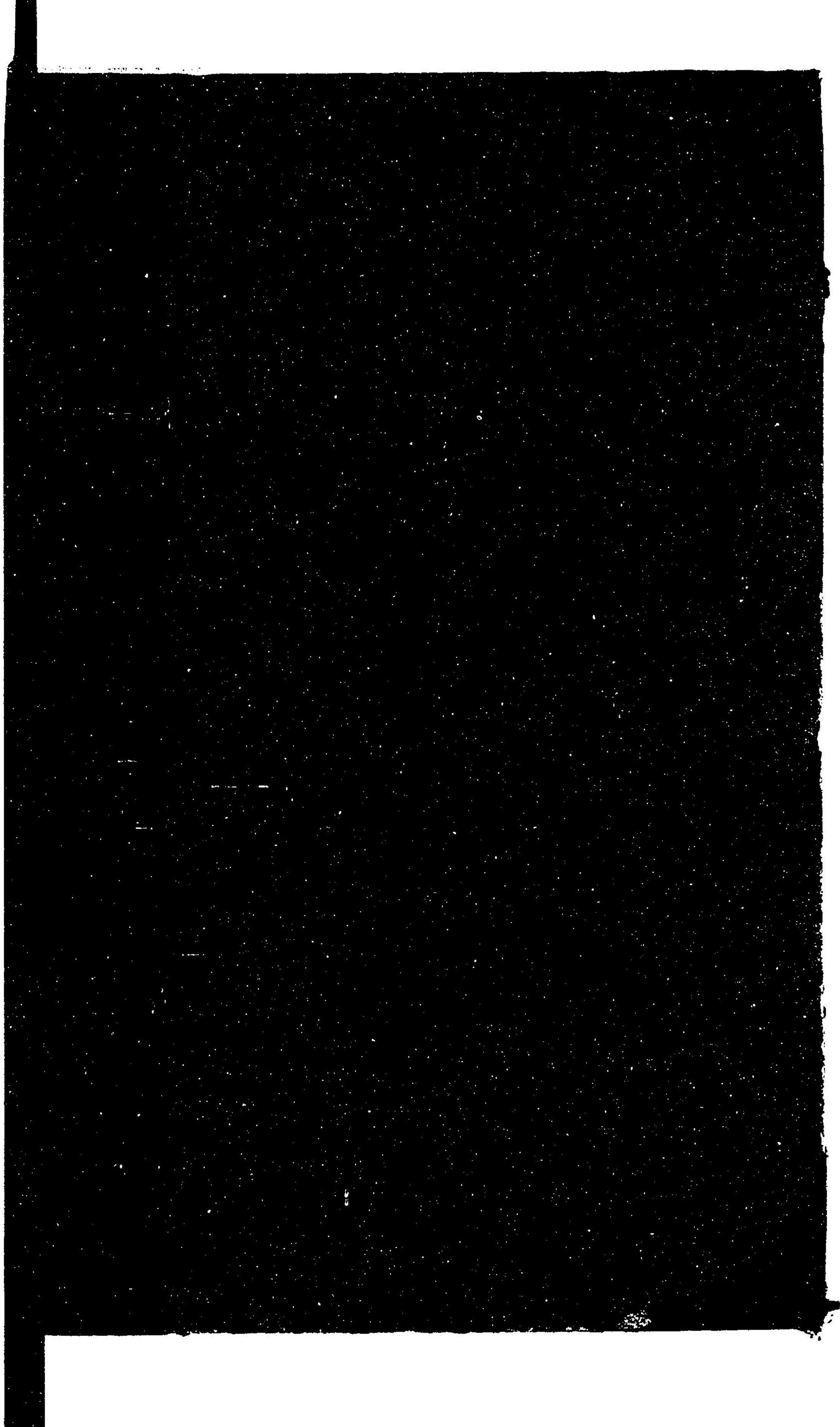
著原氏ントルミ 高橋五郎君譯

パダロス ト

近刊

失樂園の大作從來日月と光を争ふ其脚色の巧妙なる其結構の雄大なるや宇宙を吞吐して緯々餘あり魔王を掌上に弄し地獄を脚下に蹂躪す天軍魔軍旗鼓堂々隊伍整々空中に激戦し電鞭閃々雷火炎々遂に孰れか勝ち孰れか敗る亦是れ人生の秘密を金剛の筆に描き出せる者高橋氏の此翻譯亦原文一行譯文一行精細緻密加るに頭註の難句を解くありパダロス、ロストの眞面目始て茲に見つ可し今遠からずして譯成らんとす必ず洛陽の紙價を高からしめん

45
525



020089-000-2

45-525

日蓮論

高橋 五郎/著

M38.3

ABH-0291



